

くことで、それではなく“家相”です。この中にかなり色のことが出て参ります。皆さんご存じですね。明日が千秋楽ですが、今ちょうどやっている大相撲。青房・白房・赤房・黒房・これ全部意味があるわけです。東西南北ですね勿論。ところがこれ、私たちの運命に非常に関係があるのです、これを私、住まい造りをしていてよく感じるのです。例えば暦でいう五行説というのがあるのですが、その五行は木火土金水ですね。木、火、土、金、水（もく・か・ど・ごん・すい）ということで真ん中に土がはいるわけです。これが色にしますと木が青、火が赤、土が黄、金これが白金の白、そして水これは黒です。この木火土金水、土が中央がありますけど、東南中西北になります。東が青、南が赤、中央が土です、ですから相撲の土はあの土でよかったのです。そして西が白。北が黒ということになるのです。で、これは季節なのです。順番にいきます。春夏そして私達人間、そして秋冬。これが今言った青赤黄白黒になるわけですね。こういう中に色と仏教そして建物、階級。青は紫、それから赤、赤紫もあります。この紫は高貴の色で、庶民は使えなかったわけです。こんなような色の順序というのもあるのだという

ことで、これで建築をやっている大工あるいは左官屋さんなど職人達、あるいはちょっとした、襖の縁とかそういうところの色使いを注意してきたという、今で言う建築基準法みたいなものがあったということをやっとお知らせして、私のお話しにかえさせて頂きます。どうもありがとうございました。

松田：ありがとうございました。天野彰先生のお話しでした。日本文化を基盤とした新しい庶民の住居はいつ実現するのでしょうか。天然素材を離れて人工素材に頼らざるを得なくなって、好まざる方向に片寄って行ったのは残念です。日本人はもともと自然の摂理による調和に頼り、人工材をうまく使い慣れていないのでしょうか。

天野 彰

(株)日本オペレーションズ・リサーチ研究所及び一級建築士事務所(株)アトリエ 4 A 主宰。日本住改善委員会を組織し通産省産業構造審議会・厚生省福祉施設検討委員会など各委員を歴任。マスコミでも幅広く活動。著書多数。

プレイベント AIC記念カラーセミナーの記録ー2

ミニ講演その6

環境にみる日本の色彩

～建造物の巨大化・人工色の氾濫とコーディネーション～

吉田 慎悟

Shingo Yoshida

(株)カラープランニングセンター取締役

松田：最後の講演になります。『環境に見る日本の色彩』をテーマに致しまして、建造物がどんどん巨大化しております。それに付れて人工色が氾濫しておりますけれど、そのコーディネーションの問題を取り上げて、吉田慎悟先生からお話しを頂きたいと思ひます。

吉田先生は(株)カラープランニングセンターの取締役をなさっておられる色彩計画家です。政府行政関係の色彩計画を多数手掛けていらっしゃる。現在武蔵野美術大学、東海大学、長岡造形大学の非常勤講師も勤めていらっしゃいます。吉田慎悟先生よろしく

お願い致します。

◇環境色彩計画のルーツ

吉田：環境色彩計画についてお話ししたいと思いますけれども、環境色彩計画、色彩計画はこういう分野で注目されているわけですが、多分元は戦後の色彩調節あたりから始まったと思います。それで少しダイナミックな実験をしたスーパーグラフィックというのが1960年代の後半から始まりました。建築物をかなり彩度が高い色で塗っていく、あるいはグラフィックで建築自体

をおおっていくというような実験がありまして、それは日本では少し商業主義と結びつき過ぎた傾向があつて、オイルショックの時にはなくなっていくわけですが、その辺りから環境色彩デザインというような、環境の中で総合的に色を調整していこうという動きが始まります。で、私は午前中に講演があつたJ.P.ランクロさんの所に、ちょうどスーパーグラフィックの終わる時期ぐらいに行っていて、地方色の分析方法や、カラーデザインの方法を学んで戻つたわけです。丁度そのころ日本はオイルショックで、建築の色彩どころではないという感じでしたが、徐々に環境の中での色を調整しようという動きが始まり、そしてこの10年位は行政が積極的に景観の中で色彩を調整していく、綺麗な地域を造っていこうという整備が始まって来たと思います。で私たちは、そういう仕事にいくつか協力してきましたけれども、今日は3つ程その例を取り上げて、環境の中での色彩整備の方法を少しお伝えしたいと思います。早速ですが、スライドに移ります。

◇兵庫県出石の色彩

一つ目は兵庫県の出石というところの例ですが、これは兵庫県が景観条例を持っていますその景観条例のなかでの景観形成地区。それは大規模の条例と、景観形成地区という二つあるのですが、その景観形成地区というのに指定された地区です。盆地の中にある小さな人口1万人くらいの街ですけれど、その景観を綺麗なものにしていこうと。ここは昔からの雰囲気が残っています、これは去年撮った写真なので私たちが調査した時よりも随分綺麗になりましたが、黒あるいは釉薬瓦の焦げ茶色の町並み家並みがつながっていました。ここで特徴的なのは、このように町の中において行くと赤土壁の町並み家並みがつながって行きます。さらに建具は非常に細かい意匠を持った木材、木で造った建具がたくさん見られます。格子もここでは細い細格子で日本の伝統的な意匠を伝えています。私たちはこの赤茶色の土の壁の色を調査をして、そしてここにどれくらいの幅でその色があつたかということとをまず調べました。どこでもランクロさんの方法と同じですけれど、まず計画をやる場合には現況をよく知って、その現況をうまくつなげて行く、どんな場合でも現況からつなぐということを考えます。で、多分環境色彩計画の大事な所は、今ある場の問題だということです。プロダクトデザインの場合は比較的に場から離れてインターナショナルになることによって色彩の

世界を造つたわけですが、私たちがやっている仕事は場の問題・環境の問題が大事だと思います。ですから場が違えばそれだけ色彩計画の数があるということ。で、ここで見たのは赤茶色の土壁ですが、こういうふうにまだまだ沢山の土壁が残されていました。日本は高度成長期にどんどんこのような景色を壊していったのですが、今や10年ほどの間に、景観条例の中で、景観形成地区の指定をしたり、地域を再生しようという事で、色んな動きがあります。色彩もそのプログラムの中に取り入れられて、色彩の調整をしながら地域の雰囲気再生していこうということを考えているわけです。私達はこういう風にして建物の外壁の色をチェックをしてくる。これをマンセル値という数値におこして、次は全体にこの土壁の町の色表、カラーパレットですけれども、白壁もいくつかある。それから私達が鳥の子色といっていますクリーム色の綺麗な壁もあるわけです。多くは赤茶色の土壁です。ここで面白かつたのは、町の中心部の武家屋敷やお寺は白壁です。それから周辺に民家が並んでいるような所では赤茶色の土壁がある。で、色も綺麗な構図を持っていって町の骨格を綺麗に見せているわけです。私達はそういうことに注目をして、こういう白から鳥の子色を通して赤茶色の壁までを色表としてストックして、それからマンセル数値に変えていって、町の色彩構図を把握するというをやります。

◇地域の色彩構造を枠組みする

それでこれはマンセル値におこした図ですけれど、表は横が色相をとってヴァリューが明度です。それから上が彩度をとっています。赤茶色の壁というのはこここの辺にでてくるのですが、比較的彩度があつて、彩度4.0から5.5位の間に、あるいは明度は6.0くらいが中心というのが赤茶色の土壁です。それから白壁がその上に低彩度色のところにあるわけですが、そういうような構造が見つかるわけです。今後この町をこういう雰囲気により強化していこうとすれば、こういう色の幅を守っていけばいい。ということになります。ですから色彩の基準の中でも、こういう基準値を囲って彩度は幾つから幾つまで、明度は幾つから幾つまで、それから色相はYR系を中心にここからここまでの幅で改装すると、今までの雰囲気が保てますよ。あるいは評価できますよ。そういうことがあるわけです。ここでもその屋根が青い物に変わったりとか土壁がサイディングの白い物に変わったりしてしまつたけ

れども、そういうものを昔の伝統的なものの調査を行って、もう一度その色彩範囲にあったものに戻すことによって、家並みが再生していくということがあります。で、兵庫県は既に10ほどの町を景観形成地区に指定していて、この近くの温泉の城崎であるとか、あるいは室津であるとか、あるいは丹波篠山、白壁の町です。そういうところを同じような手法で景観形成地区に指定しています。こういうふうにはまず一つは守っていくといえますか、今まで日本で壊してきた経済成長のためにどんどん変わってきた景観を、もう一度発掘して探し当てて守っていく、そして更に育てていく。そういう方向が環境色彩計画の一つの基本になると思います。

◇材質色を尊重

これは東京でそれをまとめて展覧会をやったものですが、土色の壁あるいは真ん中は格子の木の色、実際には木目の入った材質感で見えるわけですが、全部陶質の色片に変えることによって、色構造がよりはっきり見えます。それから右側は屋根の色です。更にこれをひいて、全体がよく残されている町並みの立面図を起こして、そこに色がどのように分布していたかという事を考える。あるいは日本では、フランスでランク口さんがやっていた仕事の中で、色彩というのは非常に面白いと思いましたが、日本ではまだ色彩ではなくて、色と色との対比というよりも、むしろその材質色というものが大事にされている。茶色というのは、単純に色表化された茶色ではなくて、ここでは土色の茶色とか、焼き物の茶色とか、そういうふうにはまだ質と分けていない状態として、日本人は把握している状態ではないかと思うのです。そういうことでマテリアルカラーというのは非常に大事にします。ですからこの展示も実際に土壁を出石の職人の方に作ってもらって塗ったりとか、あるいは土をもう一度ここに集めて来てマテリアルとして見てもらったり、そういうこともこの展示の中で組みました。

次の例は川崎の臨海部ですけども、今のように守っていくということの逆で、むしろ作っていく、新しく作り直していくというような景観の例です。これは飛行機の上から撮った川崎ですけども、この工業地帯も同様ですが、日本の臨海部は工業地帯に埋め尽くされて、それはどこもグレーになっている。灰色になっている。で、工業地帯というのは多分二十世紀が作った、かなり大きな景観のひとつだと思いますけど、あ

まり魅力的でない。特に日本の場合には公害などでだいぶ叩かれて灰色の雰囲気が残っていると思いますが、こういう中で色彩をうまく使って環境を再生していこう。場合によっては水辺にもっと人を近づけるような装置として色をはたらかせようと、そういうことが起こっています。

これは川崎市で行いましたけれど、あるガイドラインを作って、そこでその企業の方にも協力してもらって、全体の環境をよくしていこうとした例です。例えばここは工場タンクをこのようなブルーのグラデーションに塗っていますが、ここで特徴的なのはガイドラインの中で基調色相というのを決めて自由に企業が選べるようにしたのです。私はブルー系統の色相を使うとか、ある企業は緑色を使うとか、ある企業はうちのコーポレートカラーが赤だから赤系統を使う、そういうふうにして自由に色相が選べる。川崎の中では敷地が大きいので、緑の横に赤い色相がでてきても充分その敷地の中で吸収できるだろうということで、そういうシステムをとりました。一つの工場の中は基本的には色相調和型にするというシステムになっているのです。ですからここはブルー系統でまとまっているということです。更にこれは市で、ちょっと下の方が汚いですが、遠くから見ると下は緑に隠れていくということになります。上を塗り替えていったわけですが、丁度トンネルを抜けて海へ入っていく。そういうところの入り口にあるわけですが、グラフィックデザイン拠点というのを決めて、ランドマークになるような所を幾つか積極的にカラーデザインをしていく。それがこの景観をリードしていく、それを色彩を相当強調して塗っていくことを考えたわけです。既に幾つかのグラフィックデザイン拠点というのができています。これは非常に古くて使われていなかった清掃工場ですが、その外壁をこのように透明感をもった色調で塗り分けていくという手法をとりました。それを見て、東芝だったと思いますが、東芝に長い万年塀がありまして、そこがもう少し環境全体の中に協力できるようないい景色を作りたいということで、申し入れがありまして市の方で調整をしてこの万年塀をずっと塗っていききました。今までは非常に暗いグレーの万年塀がずっと並んでいたわけですが、色彩によってこの景色が一変していききました。丁度この手前側道路を隔てた左側に清掃工場があって、この二つが出来上がったことによってこの辺りの雰囲気が随分変わってきました。それが導火線になって幾つかの企業が

内部の景観も変えていく、特に道路沿いから変わっていきましたが、内部も変えていく。そういうことが始まってきました。先程の出石のように、色が蓄積されていいものがあってそれを守っていくというのは基本ですが、そういう蓄積がない場合、蓄積があってもあまりそれが評価されない場合、そういうときには積極的に色を使って色彩空間を変えていく、そういう手法もあるのだと思います。

これも左側の上に先程の清掃工場が見えますけれどその下のトンネルのところ。ここは万年塀とか清掃工場の色が変わってきて、だんだん綺麗になってくると、汚いところが目立つわけです。このトンネルに入っていくところとかは排気ガスで真っ黒になった壁などがあったわけですが、市の方からここも是非塗り替えたいということでグラフィックデザイン拠点に指定をして、この壁の両側を塗っていくという作業をしました。またその先が汚いということが目立ってきて、どんどん改装が早まっています。色というのは、多分ペイントは比較的手軽に塗り替えられる、環境を変えていけるということが非常に利点だと思うので、こういう方向での色彩景観作りというのはこれから色んなところで試されるのだと思います。両側、海へ向かう方の車線がブルーやグリーンが塗ってある。左側、町へ帰っていくほうの車線は緑とか、黄色系統の色が塗ってある。このような景色になりました。更に右側にタンクが塗ってありますが、確か東電だったと思いますが、ここもこういう改装があるために道路に面した所は、少し色彩的に配慮をしようということで、道から見えるところは改装をしてくれました。このようにしてペイントを使って地域の景色を変えていく、新しく作っていく、そういうことも起こりつつあります。これが川崎の臨海部の例ですね。

◇色の関係性を整える

それからもう一つは、最後に詰めに立川の例というのをご紹介致しますが、色彩というのは僕は最終的にどの色が良くてどの色が悪いというのは基本的にはないのだと思います。最終的に環境の中で良いというのは関係性が良いか悪いか、ですからブルーの瓦というのは皆、日本の中では悪いといいますが、多分ブルーの瓦を生かした町というのもできないことはないだろうと思います。ただそれが今の伝統的な黒い瓦とか焦げ茶色の瓦の中に入ってきたときに非常に目立つ、関係性が乱されるから良くないのであって、関係性を

うまく整えればその色というのは相当な可能性を持っているだろうと思います。私たちは関係性を整えるということをいつも最重点に配慮しています。この場合は全体のカラーコードを作って中高層部はこのくらいの色の範囲、低層部は石の色であれば自由とか、そういうカラーコードを作って一度それぞれの建築家に色を出してもらいました。そうすると右側はデパートですから明るい色にしたいとか、ホテルはどうしたいとかくるわけですが、今までは建築はそれで立ち上がっていたのです。ここでは一度こういう立面図に並べてみて、この関係が良いかどうかということや話し合っていました。更に実際の材質を持ってきてもらって隣との関係を全部調整していくということやりました。よく建築家の方は勝手に、自分の持っている色は絶対曲げないといっている人もいますけれど、私がこの調整をやった限りでは、今までそのような調整をやった機会がなかっただけで、環境全体を良くするためには、関係性を良くしなければいけないということを、良く分かっているのだと思います。これ以降、住都公団などでも大きいプロジェクトでは、東京都と公団は建てる時にデザイン調整会議を作って、前以て色を調整するとか、そのようなことがだんだん制度化されつつあります。あるいは先程の景観条例の中に、大規模の建物を建てる場合には、周辺の建物の色もちゃんと調べて市役所に持ってきてくださいとか、関係性を調整する手法が出来上がりつつあります。このように素材だけではなくて少し大きなパネルにして素材の使い方、低層部では少し単調になるかも知れないので、石を磨いたのと、ハツリにしたのと、そういうものを使い分けてみようとか、いわゆる微妙な所までオープンにして、ここで設計をする設計者全員にあつまってもらって調整をするということをやったわけです。その結果がこうなったのですが、残念なことにちょっとブルーグリーンのラインが入ってしまっていて、あれは立川市の方で新交通の色ということで、後で入れてそこまで調整しきれなかったのですが、全体の関係からいうと、あそこのブルーグリーンはないほうがいいかなと思っています。

ここではこのように比較的穏やかな色を全体に使っていますけれども、環境アートというのがひとつテーマになってしまっていて、いろんなところに、これは夜のネオンのアートですが、いろんな所にパブリックアートが入っています。多分色の誘目性の度合いからいくと、パブリックアートが良く見えて、それから緑の樹

木が見えて、建物とか道路面というのはずっと背景でいいと思うのです。で私達は見せ方の度合いを基本的には彩度に置き換えて、見せたい有目性を高めたいものほど彩度を上げる。見せたくない背景にするものは彩度を下げる。そういうことを全体的に色彩の構成図を作ってそれで配色していく。それで建物同士の関係性を整理していく事をやります。このように色彩というものは私は関係だと思うのです。その関係は建物同士だけではなくてパブリックアートとの関係とか場合によっては、ここに入ってくる人のファッションとか車の色とかの関係。そういうものが全てあるのが環境だと思うのです。全体の色彩を整理しながら、関係性を整えながら、環境を作っていくという方法が、今かなりのところで実験され蓄積され、そして日本の環境が少しずつですけど、良くなってきたというふうに感じています。今後も環境色彩デザインに、より多くの方が理解を深めてもらって、行政の方そして一般の住民の方たちと共に、日本の都市景観、色彩景観をより良くしていくためにご協力願いたいと思います。どうもありがとうございました。

松田：吉田先生でございました。環境色彩の計画手法と色彩計画の成果についてお伺いいたしました。最近京都始め各地で環境の色彩に関心が高まっております

が、大きなエリアでの調整が必要と感じた訳です。

これで6人の先生方によるミニ講演を終了致しました。色彩の領域は大変広範でございまして、切り口も多様でありまして、この後のセクションでパネルディスカッションをやらせていただきますけれど、只今のご意見に従いまして討議を致します。ちょっと時間がおしておりまして、パネルディスカッションの時間を短くするか、あるいは終了時間を延ばすかと、このどちらかの選択を迫られている訳ですが17:45くらいまでお時間を頂戴できるかどうか、この点ご了解を頂けるでしょうか。もしよろしかったら拍手頂きたいと思えます。……

拍手をいただきましたので、では少し終了時間を延長させて戴きますのでどうかよろしくお願い致します。ここでちょっと舞台を整えますのでしばらくお時間を頂戴致します。

吉田 慎悟

色彩計画家。武蔵野美術大学、東海大学、長岡造形大学非常勤講師。川崎市都心部アーバンデザイン色彩基本計画、兵庫県景観条例色彩指導基準作成、宇宙開発事業団種子島宇宙センター色彩計画等、多数環境色彩計画を手がける。著書に「環境色彩デザイン」「都市と色彩」。